

# 本質と形相

宮内 璋

## I. 問題

*Met.Z* 卷第7章に於て、Ar は、先ず生成の三つの種類、自然的、制作的、偶発・偶運的の区別を示し、次いでこれ等にほぼ共通の生成の三原理、質料、起動因、形相を挙示している。続いて生成過程の考察に移るが、その焦点は原理、特に質料と形相のはたらきと存在論的身分(status)を見定めることにある。と言うのは、生成の原理は又、同時に存在の、現-在する事物(存在者 ta onta)の原理でもあるからである。だが、この生成過程の考察は、自然による生成ではなく、制作(poiēsis)による、即ち、技術(technē)、能力(dynamis)、思考(dianoia)による生成、しかも実体ではなく、健康という状態の生成を例として進められる(このことは説明を分かり易くするための Ar 常用のやり方であって何ら差し支えはない)。だがここで、技術による生成の場合には、生成する事物の形相は技術者の魂の内にある、と言われ、その原理的説明として「形相(eidos)と私が言うのは、各事物の本質(to ti ēn einai)であり、その第一の実体(prōtē ousia)のことである(1032b1-2)」と断定的に述べている。そして、健康(それは技術者(医者)の魂に内在する説明規定(logos)であり知識(epistēmē)である)がそれを起点として、それによって生み出される可き、そしてそれを医者が作り出し(poiein)得るそのような身体の状態、例えば或る程度の体温を医者が模索する思惟(noēsis)の局面と、摩擦によってその体温を生み出す制作(poiēsis)の局面とを区分した後で、従って、或る意味で、健康は健康から、家は家から生成する、即ち、質料なき健康、家[形相]から質料と結合した[統合体 synolon]健康、家が生成するということであり、それは、医術、建築術は夫々健康、家の形相であるからである、と述べ、原理的説明として「質料なき実体(ousia)と私が言っているのは本質(tēe)のことである(1032b14)」と断定的に結んでいる。先の原理的説明とこの結語とを併せて(両者の言うところは同一である)「形相・本質・第一実体同一定題(thesis)」と仮稱する。ここでこの断定的な「同一定題」が突如として提示され、それに直面することは大きな驚異(thauroma)である。と言うのは、(第一の prōtē) 実体とは、万物の基体たる個体<sup>(1)</sup>(tode ti, atomon, hen arithmō)であり(*Cat*)、質料と形相との結合によって生成し感覚的実体として現-在している統合体(synolon)である(*Ph.De An.Met.*)というのが揺らぐことなく堅持されている Ar の基本的把握であるからであり、この「同一定題」

<sup>(1)</sup> 個体の明確な理解、規定がそこで果たされているということではない。或る人(ho tis anthrōpos)ということである。

はこの存在論的地平に於ける実体への問いとしては微妙にそれと食違うからである。健康や家の事例を念頭に措いて同一定題を考えれば、形相が各事物の本質であると言うのは、形相が決定的という程に本質を能動的に規定しているということであって、全く同一ということではないであろう。もしそうであるならば何の故に別個のものとして本質が措定されなければならないのか、その事態が明らかでないであろう。そして形相が同時に又、第一の実体であると言われているのは、本質の場合と同様に、実体の実体たるその核心を為すものであることを強調した表現であると思う。従って、第一のと言うのは、*Cat.*に於いて種や類が第二の実体と言われ、それに対して個体実体が第一の実体といわれるのと異なり、実体内の主導的(*kyrios*)な形相の身分を言っているのである。そこで、これ迄の限り、同一定題と、それ以前の、先に *Ar* の基本的把握と稱した見解 (A 見解) との間に大きな食違いはない。しかし乍ら、目下の感覺的実体を場とする論考に於いて (それは、*ousia* とは何か *tis hē ousia*; という問いの内を動く) 形相が主導的であるのは飽く迄も質料を規定 (と結合) することによってである。即ち、この結合によって実体は生成し、現-在する、そしてその実体に於いて本質はその本質として現-在する (*H6, 1045a31-33*)<sup>(2)</sup>。従って本質は質料を含んでいるのが当然である。しかし同一定題ははっきりと質料の排除を断言している (「質料なき実体[これは形相ということにならざるを得ない]と私が言うのは本質のことである」)。とすると、同一定題は単に感覺的実体把握に於ける、そして又それを通じての存在開示に於ける形相の主導性強調という先に述べた理解で済ますわけにはいかない。本質とは正に形相である、両者は完全に同一であり、そして、それこそが正に実体であるということである、というのが同一定題の断乎たる主張ということになるからである。

この論考 (拙稿) でこの同一定題を問題とするのは、この定題の提示迄の *Ar* の存在把握の考察展開の筋 (A 見解) も、この同一定題のそれ (B 見解) も、*ousia* とは何であるのかという究極の問いの途上の感覺的実体の開示へと動いているのであるから、(1)両者はどのように関わっているのか、そしてその為に(2)より適確に B 見解を、そして(3)それがどの様に生じて来たのか、を見究めることがこれからの問いの進展のために不可欠であるからである。そこで、同一定題をめぐる主要な論議が展開されている Z 巻第 10-11 章の考察に入る前に、その理解に必要な次の事柄について述べておき度い。

## II. 論点

(i) 先ずはテキストについてである。Z 巻 7 章に於けるこの同一定題の提示が唐突であるというのは、この定題の説明に当たる部分 (1032a32-b14) 以外、9 章末尾に至る迄その主要な論議がこの定題に直接の関わりがないことにも因っている。だがその説明の部分に於いて

<sup>(2)</sup> 本質については少し後で述べる。このような論考に於ては、夫々の記述や主張について、テキストの参照指示、その意味と論証的論議、論考の趣旨との関わりについて適宜に述べることが不可欠であるが、紙枚の限定があり最小に留めざるを得ない。

は、健康の制作（生成）という好都合な事例に乗じて同一定題の正当化に努めていることは確かである。だがその正当化、乃至、論証的議論の前提に重要な基本的問題がある。それはこの論考の冒頭で述べた、形相は製作者の魂の内にある（cf. *De An* III8, 431b20-432a1）、それが医術であり建築術である、という *thesis* である。その重要な意味については後に論じなければならないが、ここでは、そうではないということが、その説明の局面で直ぐ明らかになるということだけを述べておく。即ち医者が健康の回復（生成）について思案する局面に於いて既に、身体に於ける平衡状態、体温等の、又建築の場合には石材等の質料的なものに考え及ばざるを得ないということ（1032b18-30）、即ち知識とは単に形相のみを受け容れることではないことが明らかである。このことはここではこれ迄にして、テキストについて、に還ると、周知の如く、この 7-9 章は独立した別の論考であったものが、後に Z 巻のこの個所に転入されたものであるとする見解は大方の承認を得ているが、それに加えて、あの同一定題の 7 章に於ける唐突な提示は、7-9 章が、6 章が 10 章に直結するのを妨げる中絶的転入ではないことを言うためのものである、とする見解もある。この二つの見解の内、後者との関連で、先に述べた如きあの定題提示の状況は、10-11 章の論考は細いつながりではあるが 7-9 章を経て 4-6 章につながることに、即ち本質をめぐむものであり、更に同一定題の言う形相と本質の同一によって、Z 3 章末尾で（1029a32）形相こそが正にこれから探求される可きであると言われているその筋道がこの 4 章より 11 章へと続く本質考察に他ならない、として探求の一貫した連続性を説く見解も可能であろう。そして定題の内容から見て考察の筋道の重要な転換が起っていること（それは、存在、実体考察に於ける形相への重心の移行である）を告知するものであった、と思われる。又、前者との関連では、この 7-9 章の転入は誠に適切なものであったと思われる。と言うのは、生成の原理的考察によって、質料と形相の果たすはたらきと、その存在論的身分についての重要な規定的記述が含まれており、爾後の実体考察にとって不可欠なものであるからである。ここではその内、形相についての記述のみを列挙しておく。①形相は生成消滅の過程にあることはない、②だが、有り且つ無い（このことについては Z 15.1039b26, H5.1044b21-22 に於いての如く明言されてはいない）、③精子は可能態に於ける形相を持っている、④形相は *tode ti* ではなく *toionde* である、⑤形相は分割されない (*atomon*)、等。だが、質料については自然学的にも存在論的にも基本的問題を孕み乍らも全体に渉る一応の説明がなされている（特に *Ph*.I.9 の末尾を参照）のに対し、形相については、特に②についてそのような説明はない。そしてこのことと関連するが、事物の生成消滅については、その原因は有ることも無いことも可能な原理としての質料に帰せられ、形相についての言及はない。更に⑥あの同一定題と同様、形相と本質との、又、形相と実体との同一を意味するかに思われる記述が Z 8 にある（1033b7-8, 17）が、これは同一定題の由来を示唆するものとして重要であり後に考察しなければならない。

(ii)次に、存在探求の基本的論点を考察の進む筋に沿って、一直線にとはいかないが出来るだけまとまった形になるように明らかにしておこう。この論点が明らかであるに応じて、

そこで述べられていることの志向する意味が明確になり、考察全体の成果を充実させる度も判定されるからである。 先ず、(a)Ar が「或るこれ(tode ti)」、「個(atomon)」であり「数的に一つ(hen arithmō)」であるもの(Cat.5.3b10-12)、事例として「或る人」を第一の実体(prōtē ousia)、即ち感覚的世界の最基本的存在（現-在）者(onta)として措定した時、既にそこに、明言され、或いはされない重要な含意があったことは確かである。これは含意ということではなく、第一の実体ということそのことであるが、それが現-在しなければ、それ以外の何ものも現-在し得ない(Cat.5.2b6b-c)―これは第一の実体が万物の基体(hypokeimenon)であるということである―のである限り、第一の実体それ自体は正に存在（現-在）者である。だが、それは端的に存在者と言えるであろうか。人は生まれ、そして死ぬ。この存在者は生成と消滅を免れることは出来ない。すべての人の身に沁みているこの存在感覚が最も根源的なあの問い「存在とは何か(ti to on;)」(Z 1.1028b2-4)へ顕在化することになる。同時に又、「独立して自ら現-在しているのは個体実体だけである」という否み難い事実が、これは抑々どういうことなのか、という捉え難い問いとして存在論的考察の底に持続することになる。考察の多様な局面に於けるイデア論の批判的吟味の基底にあるのはこの事実受容と問いである（例えばZ 8.1033b19-29）。他方、第二実体、即ち類や種について、例えば動物や人は、第一の実体の如く「或るこれ(tode ti)」を意味するのではなく、「或るこの様な実体(poian tina ousian)」を意味するのと言われる時(Cat.5.3b13-21)、否定的、且つ間接的にではあるが、第一の実体については、ここ(Cat.)では、「或るこれ（個体）」として現-在するもの、「基体」であることだけが述べられているに過ぎず、実体が「どのようなもの」であるかについての解明は、むしろ第二の実体に託されているのではないかという期待が仄示されている。次に、(b)存在考察の中心部分であるZ巻に於いて、(イ)その冒頭、実体カテゴリーは存在者(to on)が「何であるか、且つ或るこれ(ti esti kai tode ti)」であることを意味する、と規定されている。続く説明的記述、「それ自体として(kath' hautō)」、「独立自存する(chōrizesthai)」(1028a23)、「その基体が規定されている(1028a26-27)」、「各々の事物(kath' hekaston)(1028a27)」等によって、先の規定に於ける tode ti が現-在する具体的事物を意味していることは明らかであり、ti esti と並ぶ実体の象面として、その規定に不可欠であることが示されているのであると思う。そして、この実体の二つの象面が、Z 3章初頭で実体の四つの候補として挙げられているものの内、ti esti は「本質」に、tode ti は「基体」に夫々配されていると思われる。又、(ロ) 実体こそが他の存在者がそれによって存在者であるが故に、第一義的に且つ端的に存在者として、時間という点（独立自存 chōriston という意味）でも、説明規定に於いても(logō)、知解という意味でも(gnōsei)、第一であると言われる(1028a29-b2)時、表面上は他のカテゴリーの存在者に対して言われていることは明らかであるが、その三つの観点から考えると、実体そのものの原理に思い及ばざるを得ない。これ等の観点そのものが当然、実体そのものに及ぶからである。原理は理論的には(logō)その原理であるそれよりも先(proteron)である。だが、原理はそれとしては可能態にあって、現-在する存在者ではない。この論点はこれからの存在考察に於て常に念頭に措く可き

重要なことである。実体、存在の探求は、原理的探求であるからである。又、(ハ) <sup>イニシエ</sup>古より今に至る迄、常に問い求められ、直截な解明を許さない究極の問いとして、「存在とは何か(ti to on;)」即ち「有るとはどういうことか(tis hē ousia;)」が問われる、と荘重に告知される時、その問いが直ちに、「存在しているものについて、それは何か(perī tou...ontos...ti estin)[=何が存在しているのか]という問い(この二つの問いは不離に密着しているが同じ問いではない)へと動いたのは、それが先ずは(prōton)先の究極の問い解明への道を拓く唯一とも言う可き(monon hōs eipein)最主要的(malista)問いと考えられたからである(1028b6-7)。その主な候補はZ 2章に列挙されており、後に吟味されることになる(例、Z 16章)。そして、問題の10-11章も、候補たる存在者ではなく、この考察の道筋をめぐる吟味の一環なのではなかろうか。又、(ニ) Z 3章初頭に於て、実質的な実体の考察を始めるに当って、何が実体であると言われているかについて主要なものとして四つが挙げられているが、それ等がこれ迄に述べた幾つかの論点考察から由来していることは明らかであろう。本質と基体については先に(b) (イ) 末尾) 触れた。普遍は既に *Cat.* に於ける第二実体に由来((a) 末尾) しており、類は普遍に含まれるという意味で論議からは消えるが、最高の特別な普遍、最高類たる諸カテゴリーがそこでは考えられたものと思われる。

### Ⅲ. 本質 (to ti ên einai—têe と略称) について

ここで「本質」について述べるのは、あの同一定題に於いて「本質」は形相と第一の実体との仲介的身分を占めているにも拘らず、それ自体についても、形相との明確な関わりについても10-11章に於ても単なる断定以外、全く述べられていないからである。しかし乍ら、あの同一定題(B見解)に対するArのそれ迄の存在・実体把握(A見解)(先のI問題を参照)に於ても「本質」は明確な形で規定されてはいないのである。事実、例えば *Ph.* に於て「本質」は「形相」と恰も同義語の如く語られており(*Ph.* II2, 194a20, 3, 194b27, 195a20-21)、*Met.* に於ても、四原因を列挙する条りで「形相」に当る項目に「実体(ousia)」と「本質」を挙げている(A3, 983a27-28)。これは勿論、同一定題と同じことを語っているのではなく、異なる概念を提示することによって、その位相の密接な関りと相違とを明確にすることなく、暗黙の了解として示しているものである。だが今はそれを明確にしなければならぬ。それがZ 4-6章の「本質」をめぐる考察である。ところが、その考察には表向き形相は登場せず、そして論旨は実体と本質が同一(hen kai tauto, hen ti 1031b19,22)であることを主張しているかに見える。そこで、この事態に於て我々は、両者がどの点で、即ちどの象面で、どの存在位相に於て同一であるのかを見究めることによって、夫々の存在論的身分を明確にしなければならない。仔細にテキストを読むと、考察は概ねこの線に沿って展開していると思われる。先ず、言語表現に即して、①各事物の本質とは、その事物がそれ自体(kath' hautō)何であると言われるその何のことである、と規定し(1029b14)、続いて、君であること(君の本質)は、君が教養あること(一属性)ではなく、表面であることは、

白くあることではない、等の事例によって「それ自体」の正確な意味を明らかにしている。次いで、②実体以外のカテゴリーとその基体である実体との、或いは、或るものが他のものの述語であるような合成体(syntheta)には本質の説明規定(logos)があるのか否かが問われ、このような合成体、例えば白い人は「正に或るこれ(hoper tode ti)」と言えるもの即ち実体ではなく、又、本質とは、事物そのもの(実体)が「正に当のそれ(hoper ti)」であるそれであるのだから、そのような合成体には本来の意味での本質はない、というのがその解答である(1029b22-1030a6)。即ち、本質は本来、実体のみ属し、言語表現に即して言えば「実体の本質」なのである。それ故に③本質は、その説明規定(logos)がその定義であるもののみ有る、と言われる(1030a6-7)。この文は、謂わば外延的には②と同じこと(本質は実体のみ属する)を述べているが、本質 ti (何)を定義というロゴスに代置することによって、より開示的な(顕わにする)形で、定義は本質のロゴスである(1031a12)ことを含意として示している、即ち定義は、実体について、その本質を説明規定するものであることをここでは含意として示しているのである。だが、妥当な定義の条件として、そのロゴスが或る第一のもの(prōtou tinou)を説明している場合、と言われており(1030a10)、この第一のものとは実体を指していることは明らかであり、更に、従って本質は類の種以外の如何なるものにも有ることはない、と言われる時、この類の種(genous eidōn)<sup>(3)</sup>が、他の諸存在者を排して実体のカテゴリーを指していることは明らかであり(1030a11-17)、先の引用文に於ける「それ」も実体のことであるから、本質は本来、実体のみ有ると言われるその両者の位相の相違を、定義というロゴスを介してテキストの内に読み取ることは甚だ困難である。そこには仄示があるのみである。続いて、定義も「何であるか(to ti esti)」と同様多義的であるのではないかと問われ、後者は第一義的には実体、即ち「或るこれ(tode ti)」について、そして諸カテゴリーについては夫々の意味で言われ、「有る(to esti)」も又同様であることが語られた後、これ等の言語表現に即して語られた事態が、直截に事態そのこととしてどの様にあるのか(pōs echei)を問う第一の問いとして、「何であるか」というあの先の普遍的な問いと同様、「本質」は第一義的、そして端的には実体に、そして次にはその他のカテゴリーの諸存在者に属すると述べている。これは、第一義的、端的に、定義と本質は実体の

<sup>(3)</sup> この eidos は「種(species)」である。そしてこの句によって、文面には現れないが、形相—質料はこの論議に実質としては登場しているのである。ここでの論点に関連する限りのことを図式的に述べる。先ず事物の側から言うと、形相と質料が結合することによって実体が成立し、その実体は何であるか(ti esti)という視点から言えば、それが「本質(tēe)」である。その本質を同じくするものの集合を「種(eidos, species)」と稱する。従って、種は普遍的存在者である。他方、定義の側から言うと、それは、有る(ei esti)ことが分かった上で、何であるかを明らかにすることであり、類的なもの(質料)を種差(形相)によって分かつことによって種が成立する。そこで、実体は個として現-在するのであるから、その「何(ti)」である本質も個体的な本質として現-在している。そうでなければ、ソクラテス(個体実体)は人間(本質)であるとは言えないであろう。しかし本質を本質と言う限り、それを個、或いは普遍と言うことは無意味である。その点では形相と同じである。「類の種のみ属する」とは、この位相としての本質を同じくするものの集合が種である、という事態そのもののことであって、本質は個体実体について語ることは出来ないとか、本質は普遍であるというようなことを言っているのではない。

みに属する、という幾度も繰返される命題(1030a16-17, b5-6)と考え併せると、「本質(tēe)」とは本来、感覺的実体の to ti esti という象面を指示する概念であり、定義とは正にこの「本質」の説明規定(ロゴス)(1031a11-14)であることは明らかである。

ここでこれ迄の考察に基付き他の箇所<sup>1</sup>に於ける言及や含意を考察して「本質」の存在位相を簡潔にまとめておく。人(実体)は(=)理性的動物(本質)である—この命題が(定義、即ち、説明規定 logos)である。Z巻冒頭で、実体は「ti esti kai tode ti」と規定されている(IIの(ii)(b)(イ)を参照)。この ti が tēe であることは否めないであろう。tēe は、すべてのカテゴリーについて言われるあの ti の実体に於ける ti であるからである。そして tode ti は或るこれ(なるもの、として存在する事物)を意味、指示し(それ故に単独でも実体として代用される)、従って、ti と tode ti とは相互排除ではなく、ti として重なり合う。即ち、本質と実体は ti として同一である。従って又、この含意を了解している限り、あの実体の規定の kai を「即ち」と訳しても誤りではない。だが、実体である tode ti には tēe である ti と重ならない、即ち本質にはない位相がある。それは、tode ti と共に、何にも増して実体に属する(hyparchenin)と言われている chōriston(離在、独立自存)という位相、象面である(1029a27)。この象面は本質にはない。本質は実体の本質であり、既に「何であるか(to ti esti)」と同様、他のカテゴリーにも属していることが認められている如く、「質であること(poiō ti ēn einai)」、「量であること(posō ti ēn einai)」のように、質の本質、量の本質として、実体の場合と同様、夫々、質、量から離れて(chōriston)は有り得ない、かの如くである。かの如くと言うのは、それは誤りであると言うことではなく、誤った解釈をされ易く、その解釈は重大な誤りである、と言うことである。事態は次の如くである。実体はこれ(本質\*1)として存在している事物であり、質も量もそれなりの本質\*2(属性)として依存的に存在しているものである。それに対して、夫々の本質(\*1\*2)は、それとしては夫々存在している実体、質、量という事物、ものの本質であり、事物、ものと離れて有ることはない。しかし、事物、ものの<sup>2</sup>ということ<sup>3</sup>はそれ等に付帯する何かということではなく、何か(ti)としては同一であるということであり、唯、それとしては「有る」ということを含んでいない、ということである。それが有る、存在するということは、ti としてのそれに ti としての何ものをも付け加えることはない。だが、あの「同一定理」に於てはそうではない(1037b3-4)。それはこれから論議する問題だが、その問題に立ち入るのを避けるために、Z六章の中心部分(1021a28~)は、事物(実体)と本質との同一を帰謬法的に論証するに当って、実体の事例としてイデア(善、美それ自体)、存在、—それ自体(Ar.はこれ等を実体とは認めていないにも拘らず)等を措定したのだと思われる(1031b15-18はこのことを示しているのではなかろうか。それは同時にイデア論批判を含んでいるが)。イデアは個体的なもの(kath' hekaston)であるにも拘らず、質料からも感覺的実体からも離れて(chōristē)存在するものであるからである(1040a8-9)。ここで更めて、感覺的実体は質料と形相(卵子と精子)が結合することによって、結合体(synolon)として且つ個体として生成し、現-在する、そして本質がその ti として現-在するに至るとするのはこの同じ事象の部分的記述である、というこ

とを確認しておこう。従って、本質は（実体から）離存（chōriston）しているのではないが、原理である質料や形相とは異なる意味で実在（現-在）概念である。それは現-在する実体の ti という位相であり、「事物（実体）は何か(ti)であることなしに存在することはない」という句は実体のこの二つの位相、象面の区別と不離の関わりとを告げているのである。次に、本質について、個一普遍の重要な問題があるが、本質は ti としの実体であるのだから、それは正に実体の問題であり、又それは、個体だけが実在（現-在）する、という否み難い根本的事実の意味究明にかかっている、という予握を述べるに留め、その考察は他日を期し度い。次に、先に確認した生成、現-在の経緯から明らかな如く、感覚的実体の ti である本質が形相と質料の両原理によって形成されることは言う迄もないことである。明らかに本質、形相(morphē)、質料という語を用いてこのことを告知している論議を挙げておく。それは一なる実体の生成と現-在（ここではそれが一つであること（実体の一性）が主題である）を語っているH巻六章 1045a23-33 の末尾である。（イ）例は人間と青銅の球、いずれの場合に於ても、一方は質料（青銅）であり、他方は形相（球）である。このことの原因、即ち、可能態に有るものが現実態に有るに至ることの原因は、生成する事物の場合、制作者以外に何があろうか<sup>(4)</sup>(4)-1。というのは、可能態に於て球であるものが現実態に於て球であることには、他の如何なる原因もなく、両者の夫々における本質がその原因であったのだからである(4)-2。そして直後に、（ロ）説明規定に於ては常に、一方は質料であり、他方は現実態である(4)-3、と述べている。（イ）末尾の、「両者の夫々に於ける(hekaterō)本質」の両者とは、文面上、可能態にあるもの（球）と現実態にあるものを指していることは明らかだが、この論議冒頭の言い替えが示している如く、質料と形相を指していることも明らかである。従って上記の句は、「質料と形相との夫々が（結合することによって）形成することになる本質」という意味である。（ロ）が、ロゴス即ち定義が、形相と質料の両方を含まなければならないことを示している、ことは説明するにも及ばないであろう。最後にこの定義について一言触れておく。定義(horismos)は本質(tēe)のロゴス（説明規定）である(1031a12)。人（本質）とは（=）理性的動物である。定義である限り、左項と右項(definients)とは ti として同一（=）でなければならない。だが、ロゴスである限り definiens（これが定義の本体である）は、意味を明らかに示すという意味を内含している。であるからこそ定義は知ること、理解することの発起点なのである。

<sup>(4)</sup>(4)-1 と(4)-2 に於ける記述のつながりに基付いて、作用因(poiēsan)を本質に同一化し、更に本質の形成に於ける形相の現実態化能力を強調する強力な見解（結果的に同一定題に近い）がある。H巻末尾に於いては、同じ事態について本質への言及はないが、これは、同一化した故に言及不要というこの見解への支持根拠であるとは思えない。ともあれ、この見解に同調することはできないが、エネルギーは、運動、乃至、はたらきについて語られることが主で、実体について語られることは希である(hēs hē ousia energeia 1071b20)が故に、ここはその点でも特に重要で、熟考しなければならない。又、(4)-3 について、その直前の記述もそうであるが、質料は可能態、形相は現実態とする(Ar はここではそうである)のは妥当ではない。質料は受動的、形相は能動的、原理であるとしても、エネルギーは実体について言われる可きことで、原理についてではない。このことは実体の身分にとっても決定的なことで、厳密に考えなければならない、(1050b2-6)を参照。

#### Ⅳ. ログス（説明規定）に於ける形相

そこで、Ⅲの本質考察を念頭に措いて、あの同一定題の説明であるZ10-11章の論議、主張を出来る限りまとまった形になるように列挙・検討する。（1）その説明は、（イ）これ迄の実体、本質、形相—質料についての見解（A見解）を容認した上で、（ロ）同一定題の主旨によってその同じ問題を考察するという形で進められる。その結果（B見解）（この二つの名稱はI末尾で用いた）は当然A見解と相互に撞着する。（2）考察は定義を手がかりに始められるが、冒頭の「定義(horismos)はログスである」という句は重要な意味を担っている。ログスは至る所で定義の同義語として使われているが、ここでわざわざことわっているのは、その多義性、特に本来の意味（原義）を理解していることがこれからの論議に於て不可欠であることを示すためである。（イ）定義と同義、（ロ）形相、乃至、本質と同義（Z15章冒頭）、（ハ）言葉(verbum)、ことわり（理、ratio)の意—この二つを併せたのが原義である。（3）ログスにはすべて部分（類と種差の如き）があり、ログスとその部分と、事物とその部分とは対応しているから、（イ）後者の部分のログスが、全体のログスの内に含まれている可きであるのか、（ロ）部分が全体より先であるとすると、鋭角は直角より、指は人間より先である、ということになるが、そうなのだろうか、という二つの問いが立てられる(1034b20-30)。（ハ）この二つの問いに対する答えは直後に示されているが、その説明は後に述べられる。（ニ）第二の問い（（ロ））は第一の問いの説明を支え、且つ確認する役を担っている。（ホ）その第二の問いに於ける「より先(proteron)」とは、存在に於て(tō einai)ということを目指しているが、説明は必ずしもそうなっていない。（4）そこで第一の問い（（3）（イ））の考察に入るに先立って、（イ）そこで「部分」と言われているのは、実体を組成しているもののものであり、（ロ）質料、形相、両者の統合体(synolon)のいずれも或る意味で実体と言われるから、（ハ）質料も又或るもの（統合体）の部分であると言われるが、或る意味では形相のログス（説明規定）を構成しているもののみが部分と言われる、として暗にこの問いの答えの枠組みを定めてしまっている（論点先取）(1035a2-4)。（ニ）というのは、(i)「夫々事物[実体]と呼ばれる可きは、形相、又は形相を有するもの[統合体]であって、質料的部分はそれだけでは決してそう呼ばれる可きではない(1035a7-9)」と述べて、先ず、質料が実体の位、身分に措かれることを排除し（（ロ）参照）、(ii)次いで、質料が、本質、形相と同義である実体の部分であることを否定する(1035a17-20)ことによって、質料が事物のログスには含まれないことの説明としている、即ち第一の問い（（3）（イ））への答えとしているからである。（5）この（4）（三）の説明について、（イ）Z10章の論議に於ては、例として説明に用いられる事物は、事実に関りなく、実体の身分にあるものとして論じられていること（文脈によって分かることであるが）に留意す可きである。（ロ）その(i)について、(a)その引用文は結果としてはZ3章の質料考察の結論部分とほぼ一致し（「従って、質料よりも形相や両者の統合体の方がより多く実体であると思われるであろう(1029a29-30)」）趣旨と

しては理解出来る。だが、3章は推定であるのに対し、ここでは断定であること、又特に今ここで問題の焦点である形相（それは原理であって事物ではない）についての断定は容認する訳にいかない。又、(b)その引用文の事物の具体的な例として人を立てた時、それは身体（質料）であると言う可きではなく、魂（形相）であると言う可きだ、と言うのであろうか。これは同一定題の説明としては明らかに論点先取であろう。（ハ）その(ii)が論点先取であることは言う迄もないであろう。

問題を考察するために設定されている枠組、構えについての論議は一応これ迄として、(6) Ar が例を挙げて第一の問題を考察する論議を検討しよう。(イ) その一つはシラブル（語節 *syllabē*）と字母によるものである。そしてシラブルのロゴスには字母のロゴスが含まれている、即ち字母は形相であるシラブルの形相としての部分であり、従って定義にも含まれると言うのである。だが発声された、或るいは書かれた字母は感覺的質料としての部分であるから、シラブルのロゴスには含まれていないと言っている(1035a14-17)。これは一見、不思議な主張である。と言うのは、シラブルと字母は Ar のよく使う例であり、そして常に字母はシラブルに対し質料的構成要素として位置付けられているからである。例えば同じ Z 巻の 17 章 1041b11-33 に於てもそうであり、*Ph.195a16* 等でもそうである。そしてそれが最も妥当な例の用い方であろう。だが、ここでは語節と字母は通常とは異なる存在論的地平に措かれたものとして扱われているのである—そうとしか考え様がない。両者のロゴス（言葉—言語表現）、(*syllabē—syllambanō* 統括する) と (*stoicheia* 字母、構成要素) とを併せ考えると、その意味から含み含まれる関わりにあることは明らかである。ロゴスは意味を明らかにする (IV (2) および III 末尾を参照) からである。(i)ここで 10 章冒頭で「定義はロゴス（説明規定）である」としてロゴスの地平の開示を告げていること、(ii)語節—字母が言葉（ロゴス）の表現の形に関わること、(iii)語節—字母は常に形相—質料の説明に例として用いられること、この三つのことを総合して Ar は上記のような説明を考えたのではなからうか。憶測はこれ迄として、抑々、語節や字母は、発語され或いは書かれて始めて生ずるものであろう。そして、蠟版に書かれた字母や空中に発せられた字母(1035a15-16)と言われ、感覺的質料として語節の部分であると言われる字母とは、書かれた文字そのもの、発せられた声そのもの、即ち物象のことであろう。これ等の部分に対応する語節（シラブル）は、表音文字による言語（ギリシア語もそうである）に於ては、書かれた文字の地平の限りでは集合以上の意味を持たない。それに意味が与えられるのは一段上の音声の地平からである(*De Inter.* 冒頭を参照)。というのは、シラブルはそこで音声の或る意味での単位だからである（とするとシラブルは「音節」と訳した方が適当かもしれない）とすると、書かれた文字の場合、シラブルの形相という身分は安泰とは言えないことになる。必要な考察や論議を中断して結論的なことを言うのは性急の感を免れないが、シラブルや字母を含む書かれた、或るいは発声された言葉は象徴(*symbola*)や記号(*sēmeion*)として（これははっきりした説明とは言えない）根源的な言葉（ロゴス—理、*ratio*、ことわり、意味）に連なっている (*De Inter.* 冒頭を参照)。その言葉自体、感覺的実体の地平を超え、

形相—質料によって説明規定し難い地平のことである。従ってこの主張の論証は不可能であり、主張自体は理に合わない、と言わざるを得ない。だが、否定されたこの主張の提示は、(i)当の主張のみならず、殆どすべての問いに本質的に関わるロゴス（言葉、理、理解、意味）の探求を強く促すものである、(ii)感覚的実体の地平を超える問題を提示したこと、この二点に於て重要な意味を持っていることを付言しておくべきである。

(ロ) 次に、円と円分を例とする次の文（主張）を検討しなければならない。(i)円のロゴスには円分のロゴスは含まれていない(1034b24-25, 1035a9-10)、(ii)円分はそこに(eph' hēs)形相が重なり合う(epigignetai) (その) 質料として、円の部分である(1035a12)。(iii)だが円分は、青銅の内に(en)丸さが生じた(engenētai)場合のその青銅よりも、形相（円、丸さ）に近い(1035a9-14)。(iv)だが、円も又、円分に分けられる(1034b26-27)。以上の文（主張）は、先((イ))のシラブルー字母の場合との比較を念頭に措いて、円分は円の質料としての部分である((ii))から、円分のロゴス（説明規定）は円のロゴスには含まれていない((i))、従って定義（定義は本質の説明規定である（III の末尾を参照））は形相のロゴスだけから成っている、ということ述べているのであり、究極的には、事物の本質は形相であり、そしてそれが事物の第一の実体である、というあの同一定題(I)の意味を明らかにすることになる、という理解を表明しているのである。(a)先ず、ここでも例は感覚的存在者ではなく、数学的存在者であることは留意しておくべきであろう。だが又、人間も考察の対象として登場するが、これは単なる例としてではない、又、そのここでの登場は、人間が感覚的実体の地平に収まるものではないという Ar の理解を仄示していると思われる。(b)先ず(iv)であるが、円も円分に分けられる、線が半分の線に、人間が骨や筋になってしまう如く(1035a17-19)。この解体についての原理的説明(1035a19-b3)は、簡略に述べると次の如くである。分けられ、解体されてしまうのは、質料と形相との統合体(synolon)の質料部分であり、実体の部分（＝形相の部分）から成っているものではない。質料と結合せず、質料なしに存在しているもの、そしてそのロゴスは形相のみから成っているもの、このようなものは、決して壊滅することはない、少なくとも統合体の様には。壊滅するのは統合体であり、\*カリアスのような個体であり、個体的な円である（この\*以下の文には問題がある。後述）。この原理的説明によると、解体する限り、ここ((iv))で言われている「円」は質料を含む統合体である。そして、その質料とは、球（円）は青銅に解体されると言われている(1035a32-33)その青銅のことである。又その青銅よりも円分は形相に近いと言われている((iii))。更に、円が種類の異なる青銅、石、木等に重なり合う(epigignomena eph')のを見れば、円はこれ等から離れてあり得るのであるから、青銅、石等が円の実体に属するものでないことは明らかであり(1036a31-34) —— 離れてあるのだから、当然、本来の意味での質料でもないことは同時に明らかである筈であろう。そして更に本来の意味での円の質料は感覚的ではない知的質料(hylē noētē)であることが示唆されている(1036b32-37a5)。ここに、形相と質料の結合（統合）と分離についての Ar の微妙な把握が示されている。それは、一方①個体的な円（問題のある概念）や個体カリアス(1035a32-b3, 1037a2-3)を提示することによって（個体は

必ず質料を含む) 実体における両者統合の密接なることを強調し、他方②知的質料は、数学的事物の如く、感覚的なものの内に、感覚的なものとしてではなく内在するもの<sup>(5)</sup>、と規定して(1036a11)、その感覚的質料への依存を示すことによって、結局、円と青銅(青銅が本来の意味で円の質料であるとは思えない—それは先の(イ)に於けるシラブルと書かれた文字としての字母との関わりと同じである—にも拘らず)の場合の如く、形相と質料とが単なる「重なり合い」として容易に分離可能なることを示している、ことに現れている。

(②に於ける「重なり合い」は上記(ii)の「epi ... epigignetai」という表現に明らかに示されている。形相と質料との結合は(iii)の如く「en ... engenetai」と表現されるのが通常である)。  
①について補説すれば、個体カリアスが肉と骨に解体されることは、ここでの原理的説明にも、A見解にも撞着することはない。カリアスは無くなる(mē einai 現-在しなくなる)(Z7.1032a20-22)が、その形相(魂)はいずこかへ立去る可能性は残されているからである。  
②の補説として、青銅(質料)から円(形相)を分離する可能性と類比的に、人間の形相(魂)は、常に、明らかに質料である肉や骨等の内(en)にあり、他の種類のものに(epi)も重なり合う(epigignesthai)ということがない、我々が形相をこれ等のものから分離し(chōrisai)得ないのは、このことだけの故ではないのか、という重大な疑問が提示されている(1036b3-7)。もしそうであるとしたら、「本質(tēe)」は形成されることはないであろう、即ち人間の一性、実体の一性は成り立たないであろう(III 本質について、の末尾に近い註(4)-1, (4)-2の本文を参照)。そしてこれが、「定義は質料のロゴスを含まない」という10-11章を貫く主張に対する、そして、「本質とは質料なき実体のことである」というあの同一定題(I)に対する真正面からの反論である。これが心身統合の問題に連なるものであることは明らかであるが、それにも拘らず、先の①の補説の如き主張が成り立ち得るのは、この論考(10-11章)以前の、人類と共に古い靈魂不滅の信念が今も生きているからである。生成消滅の過程にあることなく、有り且つ無い、と言われる形相の支えは、今ここにしか無いのではなからうか。後で少し触れることになる。

(7) ここで第二の問い((3)(ロ)-(ニ))に移るが(1035b3~)、原則的には、全体よりもそれを構成する部分の方がより先であるが、必ずしも常にそうではない。だが、鋭角は直角の、半円は円の、ロゴスによって定義され説明されるのであるから、いずれの場合も全体の方が先である、とする説明(1034b30-31, 1035b6-11)は、ロゴスの言語表現の形に拠る説明であり、事態に即したものではない。それに対して、指と人間についての説明は、全身体とその部分(質料内部)のみならず、生きている、即ち魂(形相)と結合した両者の関わりの説明を含み、身体とその部分との関わりは形相である魂との結合を無視しては考察出来ない(特に部分のはたらきと感覚との関わりに於て顕著)ことを明白に述べ、全体から離れて部分は存在し得ないが故に全体の方が存在としてより先である、と結論し

<sup>(5)</sup> 知的質料のこの規定が、その例、円や線に於ける延長に適合するとは思えない(延長は感覚的なものに内在するとは言えないから)が、ここで Ar の関心は立ち入って知的質料の究明に向かうよりも形相と質料との分離可能性を証することに傾いていたのであろう。

ているのである(～1035b25)。ところで、この論議の最中<sup>サナカ アラタ</sup>で更めて、「動物の魂（これは命あるものの実体であるから）はロゴス（説明規定）に適った<sup>カナ</sup>実体、即ち形相、即ち或る種の物体の本質である・・・」とあの同一定題そのものを宣言し(1035b14-16)、従って魂の部分、そのすべての或いは或る部分は統合体である動物よりもより先である、と述べて形相の、統合体、質料に対する先行性を強調し、前後の説明を先導している。そして身体の主宰的部分とされる心臓或いは脳にロゴスたる実体が直接宿る、と述べてここの説明は終わる。

(8) 十分明らかに説明されたとは言い難い定義について（これはこの考察の起点であった）(イ) 「形相の部分だけがロゴス（説明規定）の部分であり、そしてロゴスは普遍的なものについてあるのである」と断定的に述べている(1035b34)。そして続いて(ロ) 「というのは、円の本質(to kyklō einai)と円とは同じであり、魂の本質と魂は同じであるからである」と述べ、更に続いて(ハ) 「だがしかし、統合体については・・・」と、例えば、「この円」のような、「**個体（的統合体）**」については、その定義はない、と断じている(1036a1-5)。(i)この(イ)と(ロ)のつながりから、(ロ)に於ける円と魂は夫々普遍であり、Arは、ここで本質と普遍は同じであるとしていることになる。そして(イ)の後半は、ロゴスは本質について、即ち本質を明らかにするものである、という意味であることが明確になる。又、(ハ)の冒頭に「だがしかし、統合体については」とあることが示しているように、(ロ)の円や魂は統合体ではなく、形相であり、質料と結合した部分である円分に対する端的な円と言われ(1035b1)、又、個体的な円に対して普遍的な円(1037a2-3)と言われている円のことであり、魂は先に引用した(7)末尾)宣言に於ける魂のことである。この事態説明は、「もし魂が動物、或いは生物であるとすれば、或いは個体の魂が**個体そのものである**[=ソクラテスは彼の魂であり、魂と身体**の統合対ではない**]とすれば、そして、円は円の本質であり、直角は直角の本質、即ち直角のウーシア（本質）であるとすれば・・・」と言われている(1036a16-19)事態説明と全く同じである。そこで、(a)この(ロ)と、その直前に述べられている(b)「人」や「馬」、即ち、個体に普遍的に適用(述語)され、普遍的意味での、特定のロゴス(形相)と特定の質料からなる或る種の統合体であり、実体とは言えないもの(1035b27-30, 1037a6-7)、続いて述べられる(c)個体、即ち、最終の質料との統合体、例えばソクラテス(1035b30-31)、の三者が、ここでの規準、即ちロゴス(説明規定)によって区別される可き存在者(事物、実体ということではない)として挙げられている。それによると、(a)は本来、形相であり事物の本質を決定し成立させるものとして**第一の実体**と言われる。注目す可き重要なことは、この(第一の)実体、即ち内在する形相と(最終の)質料から統合体と言われる実体が生ずる、と言われる(1037a28-30)その組成の存在論的身分と順序である(同一定題によるB見解)。形相—本質—第一の実体、は原理であって事物ではない、しかも独立自存し得る可能性を含意している。又、それ等が普遍と言われるのは、先の(ロ)の説明にある「普遍的な円」と同じ意味に於てである。(b)が通常の意味での普遍である。それが実体でないのは、そこの文脈がそう思わせ

るように統合体であるからではなく、普遍であるからである。(c)は、(a)の記述末尾に述べられた統合体である実体であるが、その組成の身分と順序が異なる。形相と質料との結合によって実体は個体として生成、現-在する。そしてその時、先の III で述べられた如く、本質はその実体そのものの「何である(ti)」という象面として有るのであり、その点(ti)で実体と同一、むしろ一体である。従って本質は、「存在(現-在)する」(これが実体のもう一つの象面である)と不離であることによって、実在(現-在)概念である(原理ではない)が、この象面を内含してはいない。

(9) (i)以上、同一定題に基付いて(B見解)二つの問いに答えることによって同一定題の正当化に務める10章の論議を考察した。その試みが成功していない状況については考察の折々に述べた。又、論議の暗黙の前提、論議を真正、内実あるものたらしめるために必須の探求すべき事象についても僅か乍ら触れた。

(ii)11章は、同じく同一定題に基付いて同じ問題を更に立ち入って論じている。それは、事物のどの部分が夫々形相と統合体との部分であるか、という論考に終始するが、結局、形質結合の仕方を巡る論議である。(イ)この結合論議が円分と円のみならず肉や骨(質料)と魂(形相)との「重ね合い(epi... (質料) epigignesthai (形相))」の可能性を含み、むしろそれを主とするものであることは、この「重ね合い」が既に先の(6)(ロ)の考察に於ける論議の主軸であったことから明らかであろう。(ロ)だが、結合とはい難い「重ね合い」の可能性を端緒として、延長(synecheia)の如き知的質料までも排除して、すべてを数に還元し、更に進んですべてをeidosに還元するプラトニストやピタゴラスの徒に対する批判(1036b7-20)はまだしも、すべての事物から質料を排除するのは無駄な骨折りであるとし、円と人間の場合は同様ではないとして若いソクラテスを批判し、魂(生命)と身体の結合を強調する条(1036b22-32)は単なる重ね合いと結合とを、事物の存在論的身分の相違によって区別される可きものとして語っているようにも見える。だが直後に(1037a7-8, 1036a16-19)、(彼の)魂がソクラテスであり・・・ソクラテスは魂であるとすれば・・・と二義性(の一面)が述べられ(とすることは、魂と身体との関わりは単なる重なり合いに過ぎないということである)、又、円についても、本質[そのもの]即ち形相それ自体ではなく、或るこれ(tode ti)であるすべての事物には何らかの質料があるとして、円にも、(青銅のような外的なものではなく)知的質料があることを認め(1037a1-5)(とすることは、円と知的質料との結合は、青銅との関わり(の如き)単なる重なり合いのようなものではない、ということである)、事物の身分の相違によって、説明に於ける「重ね合い」と結合との適用を区別す可きであるとする先の説明が適切でないことを容認する結果になっている。だが、そのことによって「重ね合い」が抛棄された訳ではない。そして(ハ)同一定題は依然として保持され、魂が第一の実体、肉体は質料であり、人や動物は両者から成る普遍的な統合体であることを更めて宣言し、個体ソクラテスが、魂、或いは統合体の二義を持つことを述べた後で、個的魂と個的肉体との個体統合体と先の普遍的統合体と

の対応を語っている(1037a5-10)。これは先の(1035b14-31)魂(形相、本質、実体)と身体(質料)夫々の部分と全体、それ等相互の先後についての説明と同様、同一一定題に基付いた事態の説明であってその基本構造は全く同じであり、説得に資する知見を与えるものではない。

(10) (i)11章は本質についての論考で締め括られている。(イ)本質は、4章以来の論議のまとめとして、それ自体としてそれ自体(auto kath' hauto)であると言われるが、(ロ)続いて、或る事物の本質のロゴスは、定義される事物の部分を含んでいるが・・・と言われ、事物がそれ自体として何であるか、の何かであること、同時に(ハ)定義は本質を明らかにするものであること、が示されている。次いで(ニ)実体のロゴスには質料としての部分は含まれておらず、この部分はあの実体の部分ではなく、統合体の部分である[というのであるから、あの実体とは第一の実体のことである]。そして、(ホ)質料と共にある統合体[これは同語反復である]にはロゴスはない(質料は無規定なものであるから)。(ヘ)だが、第一の実体については、人の場合、魂のロゴスがある。(ト)実体は内在する形相であり、これと質料とから統合体と言われる実体が生ずる[と言うのであるから始めの実体は第一の実体のことであり、それは本質である]、例えば、シモン的な鼻やカリアスが。(チ)①或るもの、事物の場合には、本質と各事物とは同一である、第一の実体の場合がそうであるように、例えば曲りと曲りであることのように。②私が第一の実体と言っているのは、或るものが或る他のものの内に、即ち質料としての基体の内に、あるとは言われない或るもののである。(リ)だが、質料としての、或るいは質料と結合したものとしての或るもの場合には同一ではない。付帯的に一つであるもの場合はここでは措いて、(チ)であるが、その②を(ト)と併せて読めば、その①は、規定によって同一とされているものを同一であると主張していることは明らかであり、「何故に或るものはそれ自身であるのか(dia ti auto estin auto, Z17.1041a14)」という問いと同様、全く無意味な主張であると言わざるを得ない。又(リ)については、もし厳密にそうであるとすると、ソクラテスやコリスコスのみならず古今東西すべての個人は統合体である個体実体として生きている限りその本質(魂)とは同一でないものとして生きているという謎に陥ることは不可避である。Arがこの重大な事例について、二義性の主張によって(1037a7-9 et passim)態度を留保していることは明白であり、又、他の解明の途が見出されてもいない現状ではあるが、謎を産むことが明らかなこの理論構成に問題があることは否めないであろう。

## V. 総括と展望

拙稿に於て筆者は、「形相・本質・第一実体同一一定題」が示す、感覚的実体、及びその枠を超える存在者の存在論的把握(B見解)と、同一一定題提示以前の、感覚的実体を中心とする存在者の存在論的把握(A見解)との、微妙ではあるがしかし基本的相違を、否み難い事実として認定し、それに基付いてB見解自身の説明的展開であるZ10-11章を、A見

解によって批判的に検討するという形で考察して来た。<sup>(6)</sup> そうするとここで当然、どうしてこのような存在論的把握（B見解）がここで現出することになったのか、という疑問が生ずる。略説すれば、（1）究極の目標である存在開示の当面の途としてとられた感覚的実体の探求、という枠を超えた存在者の探求という Ar の志向がその理由の一つとしてあったことは否めないのではないか。考察の事例として語節、円等が用いられていること、又これからの探求課題を述べる条り(1037a10-20)で知的質料や数が挙げられていることは明らかにこのことを示しているのではないか。又その理由からは逸れるが、（2）そのような（同一定題）把握に通じる基本的了解がその提示以前に既にあった、即ち相対立する把握は共に Ar の基本的了解から発しているのである、という重要な事実はどうしても述べておかなければならない。もはや克明にそのつながりを述べることは出来ないが、その了解を列挙すると、（イ）知るとは形相を質料なしに受け容れることである(*De An.* III.8)、（ロ）普遍は、或る意味に於て魂自身の内にある(*ibid.* II.5.417b23-24)、（ハ）能動理性の離存と支配—(i)この理性は、分離された時に、他ならぬ正にそれ自身であり、これだけが不死で永遠である(*ibid.* III.5)。 (ii)これなくして何も思惟することはない(*ibid.*)。 (iii)実践的三段論法に於ける初項と終項（個的事実）の把握(*EN* 1142a23-30)、個体の認識(*Z10.1036a5-6*)。 (iv)我々自身の内にあつて我々を主宰するもの、我々自身(*EN* 1177b30)、人間に比して神的なもの(*EN* 1177b30)等である。

（3）紙数も時間も規定を超えたので、結論を説明を省いて記す以外にない。(i)10-11章の同一定題をめぐる論考は上記（2）の了解事項（根本的定題）を暗黙の前提として、ousia とは何かという究極の問いを、原理的に探索した結果として成立した一つの中間的図式である（探索の筋道には既述(IV)の如く無理が多い）。上記（1）で述べたことは、探索の筋道に若干の傾きを与えたことは否めないがここでの成立、現出の本来の理由ではない。(ii)この論考の核心は行論に於て表立たない本質論である(IV(10))。そして、「（第一の）実体は内在する形相[=本質]であり、これと質料とから統合体と言われる実体が生ずるのである」と言う論定が示しているように、本質の存在論的<sup>ホカ</sup>身分、順序に重心がある(IV(8)末尾の(c)の説明参照)。(iii)この本質論の重さは、ousia の象面「存在する(*esti, einai*)」が問い（探求）から欠落ではないが、二次的なものになるという否定的効果を生む、ということになる。

（4）この事態に於て、(i)当面の対応は、（2）の了解（根本的定題）は誤りや撞着を含むものがあるから、それを匡すこと、例えば、（イ）は誤りである。事物を知ることは、形相を受け容れることではなく、その実体を、更に限定しても、本質を把握することである。

（ハ）についても、能動理性の離存と、思惟の産出主宰とは、それだけでは撞着であろう。そして、根本的定題であるから究極的解明は至難であるが、或る予握(*Vorgriff*)に迄は至っておく必要がある。そして、ここであのロゴスの根本原義を加えておき度い。(ii)我々は

<sup>(6)</sup> この論考（拙稿）の途中から、M. V. Wedin, *Aristotle's Theory of Substance: The Categories and Metaphysics Zeta*, Oxford 2000 が念頭にあったことはここで述べておかなければならないが、その基礎理解と論評には未だ及び得ない。

あの究極の問いの内に、途上にいるのであるから、この論考の底にある「現-在しているのは個体だけである」という暗黙の定題（これは、感覚的実体を透して *ousia* へという探求と一体と言える程密接な関わりにある）の意味に参入するために、個体とは、という問いに入って行かなければならない。その考察の途上で、意味への途が拓かれ得ると私は思っている。これは展望への展望である。